〝ハマちゃん〟高知に移住

「釣りバカ日誌」モデル 黒笹さん

「魅力的な自然 来る運命」

「自然の中に身を置くのが一番気持ちいい」と黒笹慈幾さん。仁淀川でアユ釣りを満喫（越知町鎌井田本村）

釣りバカの〝ハマちゃん〟が、高知の自然にほれ込み移住してきた!?　「定年後は釣り三昧（ざんまい）を夢見ていた」という黒笹慈幾（くろささやすし）さん(61)。実は、漫画や映画でおなじみ「釣りバカ日誌」の主人公・浜崎伝助のモデルとなった人物だ。今年4月、東京都から家族3人で高知市に引っ越してきた。

ハマちゃんと言えば釣りに明け暮れ、出世とは縁がないサラリーマン。一方の〝黒ちゃん〟も無類の釣り好きだが、大手出版社「小学館」の編集長を務めた。

ハマちゃんのモデルたるゆえんは若手時代。「黒笹みたいな人間を主人公にした漫画ができるんじゃないか」。当時の上司が釣りバカ日誌の原作者・やまさき十三さんに提案したことが、きっかけだったという。

黒笹さんは、やまさきさんと原画を手掛ける北見けんいちさんが認める〝ハマちゃん〟となり、同作品の初代担当者に。大ヒットに導く生みの親になった。

その後、「仕事しながら釣りができるぞ」と誘われ、同社のアウトドア雑誌「BE-PAL（ビーパル）」の創刊から携わった。「全国の海山川に行きました」という中、特に「仁淀川びいき」で豊かな自然に加え、人情、食などに魅了され「高知に来るべく運命で来たとしか言いようがない」。黒笹さんも含め、家族はそれまで首都圏暮らし。不安もあったが、定年後の移住に踏み切った。

「現役時代はすごい仕事人間。『4勤3釣』でしたが、これからはせめてひっくり返して『3勤4釣』の日々を送りたい」

夢の釣り三昧も楽しみにしているが、「3勤」にはこれまでの経験を生かして「高知の役に立ちたい」との思いがある。

「高知の自然は、お金に換算できない価値がある。〝財産目録〟の洗い出しをして全国に発信し、心の安らぎを求めている、僕のようなシルバーIターンを増やしたい」と意気込んでいる。

黒笹さんは10月から月2回のペースで、本紙にエッセーを執筆する予定。

（加治屋隆文）

わたし、東京から来た浜ちゃんです。 1

黒笹 慈幾

釣りがしたかったからでしょ

なぜか高知へ

五台山のむこう、東の空が明るくなり始める時刻には決まって目が覚める。

リビングのサッシを開けると、初秋の冷気がさっと顔を撫でて、ちょっと湿った水の匂いが鼻の奥にすーっと忍び込んでくる。

サンダルをつっかけて13階のベランダに立ち、寝ちがえて油の切れた首をムリヤリ270度くらいの振幅でひねると、眼下に朝の空を映した鏡川が大蛇のように横たわり、西の方角には幾つもの橋を従えて鏡、仁淀の山々が灰色のシルエットを浮かび上がらせている景色を見ることができる。

向かいのマンション屋上の広告塔あたりでイソヒヨドリが清々しい声で歌い始めると、やがて桟橋通の方から、土電の忙しい機械音がきこえてきて、隣の公園からは散歩老人たちの元気な声が湧き上がってくるはず。

「ほんとうに高知に来ちゃったんだ」

妻も息子もまだ起きてこない、私だけのプレミアムな朝の15分……。

淹れたてのコーヒーをすすりながら頭のてっぺんからつま先まで、全身にはりめぐらせたセンサーを総動員して、私の身体がリアルにいまこの瞬間高知に「存在していること」を感じる、これは夢ではなくて現実であることを確認する。毎日のこの時間がとても気に入っている。

さてさて。私は東京23区を外れた西の郊外で生まれ、育った。小学校のときに少年サンデーや少年マガジンが創刊され、中学校のときに東京オリンピックやビートルズがやってきて、高校3年のときに東大の入試がなくて、大学に入ったらいきなりロックアウトだった世代、といえばわかりやすいかもしれない。

そんな世代に生まれて東京の小、中、高、大学を経てそのまま東京の会社に就職したので、東京以外の土地に住んだことは一度もない。それなのに昨年の11月4日、定年退職の当日には高知に移り住むことを決めていた。

イラスト・松本康裕

そのあと高知と東京を行ったり来たりしながら住む家や子供の学校さがしなどの準備を整えて、住んでいたマンションを売り払い、退路を断って（きっぱり）、妻と小学5年生の息子と一緒に高知にやってきたのが今年の4月上旬のこと。ちょうど満開の堀川の桜が迎えてくれた。

「高知のご出身？」「いいえ」「じゃなぜまた、高知へ？」「どなたかお知り合いでも？」と必ず聞かれるので、最近は「もともと脳南下症気味だったもので…」と煙にまいている。流行り言葉でいえば典型的な「シルバーIターン」ということになるのだろうが、私自身なぜ高知だったんだろうと自らに問いかけることがたびたびある。

「ご縁があったから」「行き当たりばったりの人生を一度やってみたかったから」「夢に何度も出てきたから」「運命だったから」などなど、カッコいい理由をいろいろ並べ立てるのだが、結局は妻が言うように「釣りがしたかったからでしょ」のような気がする（カッコよくないな）。

日本一高い津波と強烈なマグニチュードがやってくることがほぼ約束されているこの地へ、「釣りがしたかったから」という、なんだかとってもノーテンキな理由でノコノコやってきた釣りバカ「浜ちゃん」こと、わたくし黒笹慈幾（くろささやすし）の独り言に、しばらくこの高知新聞の紙面を通じてお付き合いいただければと存じます。

（南国生活技術研究所代表・元編集者、高知市在住）

＝月2回掲載

50年生まれ。74年小学館入社。ビッグコミックオリジナル編集配属。「三丁目の夕日」「人間交差点」などのヒット作を生み出す。なかでも初代担当者として関わった「釣りバカ日誌」では、主人公・浜崎伝助＝通称ハマちゃんのモデルとなった。98年から2003年までビーパル編集長。

忘竿堂日記

夢枕獏

倒れるまで仕事、起きあがれなくなるまで遊ぶ。

【十一話】秋なのである

1951年神奈川県生まれ。『キマイラ』『餓狼伝』『大帝の剣』『陰陽師』などの人気シリーズ作品を発表。89年『上弦の月を喰べる獅子』で日本SF大賞、98年『神々の山嶺』で柴田錬三郎賞、11年『大江戸釣客伝』で吉川英治文学賞・泉鏡花文学賞・船橋聖一文学賞を受賞。締切に追われる多忙な日々の中、釣り・旅・陶芸・落語など幅広い趣味を謳歌している。

今、四国は高知県のホテルの部屋で、この原稿を書いているところである。

十月某日——。

四日間、仕事をしながら県内の川で鮎釣りをやってきたのだ。

四日間ともよく晴れた。風の中にはまだ枯れる前の秋の葉の香りが混ざり、水は澄んで実に気持ちがいいのである。毎年、秋のこの時期には四国へやってきて、鮎のエサ釣りをするのである。鮎と言えば、友釣りか毛鉤りを使ったドブ釣りが知られているが、鮎のエサ釣りというのがあるのである。

ぼくの住んでいる小田原の早川でも、秋になるとこのエサ釣りが解禁になる。茹でたシラスをエサにして、浮子でアタリをとる。

しかし、四国の某河川では、シラスはコマセである。生のシラスをミンチ状に細かく叩いて、これをコマセにして、ノレソレをエサにする。ノレソレというのは、アナゴの幼魚で、シラスのように透きとおっている。これをハサミで小さく切って、小さな鉤にちょんがけして流れに入れてやると、次々と鮎が掛かって、竿をぐいぐいと曲げる。この時期、鮎はひと雨ごとに落ちて、河口近くに溜る。これをねらうのである。

この釣りをいつも一緒にやっていた東京在住であったK氏が、めでたく定年をむかえ、某出版社を退職して、なんと高知県の住人となってしまった。だから、今年は、K氏が高知空港まで、ぼくをむかえに来てくれたのである。高知県は、海よし、川よし、ほどよき文明もあって、人生の後半戦を生きるには実によい所である。

いつか高知に——とK氏は以前から言っていたのだが、しかし、問題は家族である。ぼくも、人生の後半戦は四国で——という思いがあったのだが、なかなか家族やカミさんの了解が得られない。どうせ、釣りばかりやるつもりなんでしょうと、こちらのたくらみは見透かされてしまっているのである。K氏の場合、高知県行きを後押ししてくれたのが、昨年の福島の原発事故である。原発は怖い。それで、K氏は晴れて東京を離れ、高知県人となることができた。

空港に迎えに来たK氏はすっかり高知県人の顔である。

某出版社に、定年後も何年か残ることはできたのだが、それをきっぱりとやめて、高知の人間となってしまった。

定年後、自分の好きな土地に移住して、趣味の釣りも、仕事もする。これがうまく行けば、K氏のケースは定年後のいいビジネスモデルになるのではないか。

K氏から聞いたエピソードをひとつ。

勤め先をやめるにあたって、前々からつきあいのあった人物に——

「これまで、仕事であなたとおつきあいをしてきましたが、今後は私から連絡することはありませんので、あなたからの連絡もいりません。したがって、お歳暮もお中元も、もう贈って下さらなくて結構です。私からも贈りません」

このように言ったというのである。

「どうしてですか」

と問われて、

「あなたが嫌いだからです」

本当にそんなこと言っちゃったの？

と訊いたら、

「言っちゃいました」

とK氏はすがすがしく笑ったのである。

いやいや、なんとも凄いエピソードである。

定年というのは、確かに悩ましいものである。この定年をどうむかえるか、その後をどう生きるかということは、その男の、あるいはその女のこれまでの生き方がなんぼのものであったかを、大きく問われることだからである。

そんなわけで、実りの秋なのである。

ぼくも六十一歳となった。

ぼくの仕事に定年はないのだが、この秋を迎えるにあたって、どのような収穫をすべく生きるかを、しみじみと考えているところなのである。

挿画／村上豊

NPO法人　食と健康を学ぶ会　第六回講演会